

アイルランド中等教育における宗教教育

表 真 美
(教育学科教授)

1. 研究の目的

(1) 我が国の学校教育と宗教教育, 宗教文化

宗教教育は「宗派教育」「宗教知識教育」「宗教的情操教育」に分けることができる¹⁾。

教育基本法では、戦後の占領政策における論議²⁾から「宗教に関する寛容の態度」「宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位」は尊重すべきとするものの、公教育における「特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動」(第15条)の禁止が続いている。

「宗教的情操教育」については、中教審答申やその後の教育改革国民会議、教育基本法改正の論議でもその重要性が度々語られた^{3)~5)}。しかし、「宗教的情操」とは、宗教的信仰に伴う感情の体系であり、「既存の宗派宗教との関係なくして存在することはできない。」といった見解も多い⁶⁾⁷⁾。現在の小・中学校では、「宗教

的情操教育」は「道徳」の中で、「生命や自然、崇高なものとのかかわり」として位置付けられ、「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」といった表現で表されている^{8)註1)}。また、高等学校「倫理」には、宗教を理解することで日本人、人間としての在り方を学ぶことが内容に盛り込まれている(表1)。

「宗教知識教育」は、中学校「社会」(表2),

表2 現行中学校社会学習指導要領における「宗教」

地理的分野	(1) 世界の様々な地域 イ 「世界各地の人々の生活と環境」については、世界各地の人々の生活の様子を考察するに当たって、衣食住の特色や、 生活と宗教とのかかわり などに着目させるようにすること。その際、 世界の主な宗教の分布 について理解させるようにすること。(内容の取扱い)
歴史的分野	(2) 古代までの日本 ア 世界の古代文明や 宗教のおこり 、日本列島における農耕の広まりと生活の変化や 当時の人々の信仰 、大和朝廷による統一と東アジアとのかかわりなどを通して、世界の各地で文明が繁栄され、東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解させる。(内容) アの「 宗教のおこり 」については、 仏教、キリスト教、イスラム教 などを取り上げ、 世界の文明地域との重なり に気付かせるようにすること。(内容の取扱い)
	(2) 古代までの日本 ウ 仏教の伝来とその影響 、仮名文字の成立などを通して、国際的な要素をもった文化が栄え、後に文化の国風化が進んだことを理解させる。(内容)
公民的分野	(4) 近世の日本 アの「ヨーロッパ人來航の背景」については、新航路の開拓を中心に切り扱い、 宗教改革 についても触れること。(内容の取扱い)
	(1) 私たちと現代社会 ア 「私たちが生きる現代社会と文化」の「現代社会における文化の意義や影響」については、科学、芸術、宗教などを取り上げ、 社会生活とのかかわり などについて学習できるように工夫すること。(内容の取扱い)
公民的分野	(4) 私たちと国際社会の諸課題 ア 「世界平和と人類の福祉の増大」については、 国際社会における文化や宗教の多様性 についても触れること。(内容の取扱い)

表1 高等学校倫理における「宗教」

(2) 人間としての在り方 としての在り方 生活方	ア 人間としての自覚	人生における哲学、 宗教 、芸術のもつ意義などについて理解させ、人間の存在や価値にかかわる基本的な課題について思索させることを通して、 人間としての在り方生活方 について考えを深めさせる。
	イ 国際社会に生きる日本人としての自覚	日本人にみられる人間観 、自然観、 宗教観 などの 特質 について、我が国の風土や伝統、外来思想の受容に触れながら、自己とのかかわりにおいて理解させ、国際社会に生きる主体性のある 日本人としての在り方生活方 について自覚を深めさせる。
(3) 現代と倫理	イ 現代の諸課題と倫理	生命、環境、家族、地域社会、情報社会、 文化と宗教 、国際平和と人類の福祉などにおける 倫理的課題 を自己の課題とつなげて探究する活動を通して、論理的思考力や表現力を身に付けさせるとともに、 現代に生きる人間としての在り方生活方 について自覚を深めさせる。

文科省学習指導要領より作成(傍線は筆者による)

文科省学習指導要領より作成(傍線は筆者による)

高等学校の「地理歴史」にもその発展的な形で内容が見られる。「宗教」について総合的に学ぶのではなく、各分野で個別の事象として取り上げられている。諸外国の宗教教科書を対象とした研究によると、公教育においてキリスト教、イスラム教、仏教などの宗派教育を行っている国は他の宗教を尊重し、宗派教育を禁止する国では、各々の宗教を徹底的に公平に扱っているのに対し、我が国の教科書は、公平性がみられず、特定の宗教を偏重する傾向にあるという⁹⁾。

2008年の統計数理研究所の国民性調査によると、「宗教について、何か信仰とか信心をもっているか」という質問に対し、「信じている」との回答は27%であり、1958年の35%から、5年ごとの調査結果は漸減している。しかし「宗教的な心」に関しては、「大切」が69%、「大切にない」が19%であり、1958年から一貫して7割前後が「大切」と回答している¹⁰⁾。その宗教意識を育みながら「宗教」に対する正しい知識を身に着けさせることがこれからの公教育の課題であろう。

(2) 宗教と子どもの人間形成

筆者はこれまで、一連の質問紙調査から、家庭教育と宗教との関連について明らかにしてきた。幼稚園・保育園に子どもを通わす保護者を対象とした調査では、園を決めた理由として「仏教・キリスト教精神を教えていること」を選んだ「宗教重視グループ」の保護者、また、無宗教の園よりも、宗教系の園に子どもを通わす保護者の方が、知育、情操教育、躾、家庭内のルールを決めるなど、家庭教育全般に熱心であった¹¹⁾。幼稚園教諭・保育士を対象とした質問紙調査では、宗教系の園とそうでない園に分けて比較分析を行った結果、宗教系の園の教諭・保育士の方が、全体的に園児、保護者の態度を良好に判断していた¹²⁾。さらに、女子大学生を対象とした調査では、小・中学生時に仏壇・神棚などにお供えしたり拝んだり、墓参りをした頻度の高い学生は、小中学生時の家庭教育や親子のコミュニケーションの頻度、および現在のバスや電車でお年寄りや体の不自由な人に席を譲る頻度が高くなった¹³⁾。

すべてにおいて、宗教との関係が家庭教育にプラスの影響を及ぼしていた。梶田は、いのちの教育に関する著書の中で、宗教的な考え方が子どもの人間教育のために有効であることを述べている¹⁴⁾。「宗教と子どもの人間形成」について、より深い考察が求められている。

(3) アイルランドの教育制度

アイルランド共和国は北海道ほどの国土に約460万人が暮らす西ヨーロッパの国である。1810年より英国に併合され、1949年に共和制を宣言（英連邦を離脱）した。公用語はアイルランド（ゲール）語と英語、2011年の国勢調査によると、84.2%がカトリック教徒である¹⁵⁾。

アイルランドの教育制度は教育・技能省によって定められ、初等、中等教育を無料で受けることができる。義務教育は、初等教育から中等教育の前期にわたる6歳～15/16歳までの9年間となっており、学校予算の大部分は国からの補助金で賄われている。その後国内統一試験（Junior Certificate）を受け、中等教育の後期が終了する17/18歳まで教育を受ける者が多数を占めている。生徒は中等教育が終わる時点で、公立・私立にかかわらず国内統一試験（Leaving Certificate）を受け、高等教育への資格を取得する。アイルランドではこの試験の成績により、大学進学先や就職先の決定に大きな影響が出るため、同試験が重視されている。

中等教育は、普通中等学校、職業学校、コミュニティ・スクール、コンプリヘンシブ・スクール（総合中等学校）で行われている。各々の割合は、約半数が普通中等学校、職業学校は約35%、コミュニティ・スクールは1割ほどで、残りの数%がコンプリヘンシブ・スクールである。コンプリヘンシブ・スクールは、普通教育と職業教育双方の教科を用意し、生徒が各自の適正・能力に応じた教育を受けられるようにしている。コミュニティ・スクールは、双方の教科を提供するとともに、地域の成人に学習機会を与えることを目的としている。中等学校は民間経営であり、半数以上を修道会が運営、残りは学校法人等が経営している。ほとんどの中等学校の教育費は無料である。職業学校は職業教

育委員会によって運営されている。

後期中等教育を修了した者の約46%は大学等の高等教育機関に進学する。高等教育には総合大学、科学技術カレッジ、教員養成カレッジがあり、ほとんどが国の予算で賄われている。私立のカレッジもあり、主にビジネス関連コースを提供している^{16)~20)}。

(4) アイルランドの学校と宗教

アイルランドでは、現在小学校の96%、また、普通中等学校のほぼすべてが特定の宗派により運営される私立学校である²¹⁾。学校の運営母体の多くは修道会（カトリック教会によって認可された宗教団体）が占めている。1831年に国民学校が成立し公教育制度が始まる過程で、キリスト教会による学校運営が決定づけられた²²⁾。その後イギリスによる長い統治を経て現在も、歴史的経緯から、学校運営における宗派の位置づけには大きな変化がなく、宗派が学校の生活を特色づけている。しかし、財政面は国と地方が負担し公立に等しく、教育は無償である。また、教育課程は、全国カリキュラム・評価委員会の助言に基づき、教育大臣が決定している。さらに、学校の運営は宗派や個人が行う場合もあるが、多くは教師と親の代表や地域の識者などを含む学校理事会が行っている²³⁾。

(5) 研究の目的

前述のように、我が国の学校教育における「宗教教育」についてはさらなる検討が望まれる。また、平成30年より、道徳教育は「特別な教科」として日本の学校教育に位置付けられる。いじめや不登校、少年犯罪、若者のモラルの低下など、多様で深い社会問題がその背景にあることは言うまでもない。日本のモラル教育は過渡期にあり、その将来を考えるうえで、多くの資料が必要である。「宗教教育」に関してもその例外ではない。先に述べたように、子どもの人間形成と宗教は深く結び付くと考えられるからである。

一方、アイルランドの宗教教育に関する日本の研究蓄積は極めて少ない。日本とは大きく異なる宗教文化や学校制度を持つ国ではあるが、アイルランドの宗教教育の現状を知ることは、

日本の今後の宗教教育、モラル教育を考える貴重な資料となり得るだろう。

そこで、本報告はアイルランドの中等教育における宗教教育の現状について、前期中等教育を中心に明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

本報告において用いた研究資料は、①「国内統一試験委員会」による資料、②「全国カリキュラム・評価審議会」による宗教教育ナショナルシラバス^{註2)}、教師用ガイド、および生徒向け教科紹介パンフレット、③前期中等学校教科書の3つである。

(1) アイルランド国内統一試験委員会による資料

国内統一試験委員会（State Examinations Commission）による資料は同ホームページより入手した²⁴⁾。前述のように、アイルランドでは、原則として、前期中等学校、後期中等学校の最終学年の全生徒が履修した全教科において、学年末の6月に国内統一試験が実施されている。各教科の試験の受験人数や男女比などは、教科選択の現状の指標となる。

(2) 宗教教育ナショナルシラバス・教師用ガイド・生徒向けパンフレット

宗教教育ナショナルシラバス・教師用ガイド、および生徒向け紹介パンフレットは、全国カリキュラム・評価審議会（NCCA：National Council for Curriculum and Assessment）ホームページより入手した²⁵⁾。

(3) 宗教教育教科書

アイルランド前期中等学校では、ほとんどの教科の授業において教科書が使われている。教科書は、複数種の出版の中から、教科を担当する教師が指定し、指定された教科書を生徒・保護者が書店で購入する。3学年の内容が1冊になった教科書は宗教教育に限らずA4版300ページ以上で多くの内容を含み、各々に個性はあるものの、すべての教科書がナショナルシラバスに準拠している。本報告では、大手教科書出版会社 The Educational Company of Ireland 社出版の「A Question of Faith 3rd Edition」

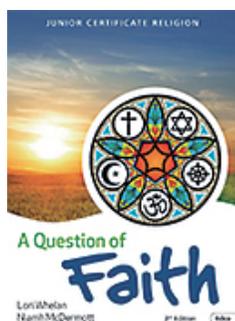


図1 前期中等学校宗教教育教科書

(図1)²⁶⁾を選んだ。本書は改訂年が最も新しく、現代的な事象を含んでいたためである。

3. 研究結果

(1) アイルランド中等教育における宗教教育の位置づけ

アイルランドの中等教育においては、前・後期共に必修教科は「アイルランド語」「英語」「数学」の3教科、その他はすべて国が定めた選択教科である。すべての教科において、国がナショナルシラバスを設けている。多くの教科においては、前期中等学校2年次より通常レベル (Ordinary Level) とハイレベル (Higher Level) とに分かれて授業が行われ、国内統一試験も別に実施されている。前期中等教育は2022年を完成年として現在改組が進行中であり、レベルの区別が廃止される予定である。各学校により設置教科、および教科選択の指導の方法が異なり、学校ごとの特色となる。職業学校には普通教科の他、実践的な教科が多く置かれている。概ね前期中等学校では10教科、後期中等学校では6から8教科を選択する。

小学校における宗教教育は、各々の宗派に任されている。中等教育ではナショナルシラバスが制定され、教科として国で統一された教育がなされている。

1) 前期中等学校における宗教教育

国が定めた前期中等教育における選択教科は、「アート・クラフト」「古代ギリシャ語」「ビジネス」「市民・個人・政治教育」「古典」「環境社会学」「フランス語」「地理」「ドイツ語」「歴

史」「家庭科」「イタリア語」「ユダヤ学」「ラテン語」「材料工学」「金属加工」「音楽」「物理学」「宗教教育」「科学」「社会・個人・健康教育」「スペイン語」「工学グラフィック」「テクノロジー」「タイプライティング」(アルファベット順)の25教科である。

2015年6月に実施された国内統一試験の「宗教教育」の両レベルの合計受験人数は27,408名であり、結果が公表されている22教科のうち、「市民・個人・政治教育」「地理」「科学」「歴史」「フランス語」に次ぎ6番目の人数である。全体の46%の生徒が試験を受けていた。

2) 後期中等学校における宗教教育

国が定めた後期中等学校における選択教科は「簿記」「農業経済」「農業科学」「古代ギリシャ語」「応用数学」「アラビア語」「美術」「生物」「ビジネス」「化学」「古典」「建築学」「デザイン・グラフィックス」「経済」「工学」「フランス語」「地理」「ドイツ語」「ヘブライ語」「歴史」「家庭科」「イタリア語」「日本語」「ラテン語」「音楽」「物理」「物理化学」「政治社会」「宗教教育」「ロシア語」「スペイン語」「テクノロジー」(アルファベット順)の32教科である。

2015年6月に実施された国内統一試験の「宗教教育」の両レベルの合計受験人数は1,167名であり、結果が公表されている29教科のうち21番目の人数であり、全体の2.1%が試験を受けていた。

アイルランド中等教育における宗教教育は、選択教科として位置付けられている。他教科の場合、原則的に選択した教科の国内統一試験を受験しなければならないが、選択教科のうち、宗教教育に限っては、学校によりこの状況が異なる。前期中等学校においては半数近くの生徒が受験しているが、後期中等学校で宗教教育の試験を受験する生徒はごく一部であった。しかし、教育統計では後期中等教育では7割以上が宗教教育を選択しているとのデータがある²⁷⁾。実際に、後期中等教育においても毎週2時間の宗教教育の授業を行っている学校が多く、アイルランドにおいて宗教教育は、他教科とは異なる特殊な選択教科として位置付けられているこ

とが明らかとなった。

(2) アイルランド中等教育における宗教教育の内容

1) 前期中等学校ナショナルシラバス

2000年に全国カリキュラム・評価審議会から出された現行の宗教教育ナショナルシラバスはA4版で48ページ、目標、内容、評価の構成となっている²⁸⁾。

宗教教育の目標が以下の5つ掲げられていた。
①あらゆる時代、年代のすべての人々にとって、人間としての意味を探求するのは普通であることに気づかせる、②宗教の中で、その意味の探求がどのように発見され、発見され続け、表現されているのかを探らせる、③特にキリスト教における神と宗教の伝統を理解させ、それが、我々が生活する文化にどのように貢献するのか、個人のライフスタイル、個人間の関係、個人とコミュニティとの関係にどのような影響を与え続けるのかを理解させる、④宗教の伝統の豊かさに感謝させ、無宗教の人生の解釈を認めさせる、⑤生徒の精神的道徳的發展に寄与する。

内容は、パート1と2の2つに分かれ、パート1は3セクションから2つを生徒が選び、パート2は3セクションとも必修である。パート1のセクションはA. 信仰団体、B. 宗教の基礎：キリスト教、C. 信仰の基礎：世界の主要宗教、パート2のセクションは、D. 信仰への質問、E. 信仰の式典、F. モラルチェンジ、である。各々のセクションは5つの項目から構成されていた。各々のセクションの目標と項目を表3に示した。

パート1のセクションAからCまでは宗教知識教育、パート2のセクションD、Eは宗派教育、セクションFは特定宗教と結びついた宗教的情操教育といえる。前述した宗教教育全体の3番目の目標には、「特にキリスト教」とあるが、D、Eの宗派教育の項目ごとの目標では、特定の宗教を限定せず、「the chosen major world religion (選択された主要世界宗教)」という表現を用いていた。

さらに、各内容項目には、「内容項目ごとの目標」と「内容項目ごとのキーコンセプト」、

「内容項目ごとの内容」が示されていた。例えば、表3における「セクションA信仰団体」の「内容項目1コミュニティ」の内容項目内の「目標」は、①異なるタイプのコミュニティとそれらの例を認める、②これらのコミュニティの通常および特別な性質を理解する、③個人とコミュニティの間の緊張を探る、「内容項目1コミュニティ」の「キーコンセプト」は、①協力と非協力、②シェア、③コミュニケーション、④役割、⑤コミュニティ崩壊、「内容項目1コミュニティ」の「内容」は、①コミュニティの形とタイプ、②コミュニティの性質、③コミュニティの長所と欠点、④人間がコミュニティにおいて生きる必要性、およびグループのニーズと個人のニーズの間の緊張、⑤コミュニティの生活と個人の自由、である。

さらに、全国カリキュラム・評価審議会は、新入生徒の教科選択をサポートするため、全各教科を新入生にわかりやすく紹介する生徒向けパンフレット、“Fact Sheet” (全教科A4サイズ2ページ)を用意している。宗教教育のFact Sheetの1ページ目前半部分を図2に示した²⁹⁾。「宗教教育は、人々は何をなぜ信じ、その信仰は自分や他の人々、私たちの周囲の世界にどのように影響するのかについて学びます。多くの宗教、とくにキリスト教が、今暮らすアイルランドをどのように形づけているのかを探ります。」とあった。

2) 前期中等学校教師用ガイド

全国カリキュラム・評価審議会は、各教科のナショナルシラバスとともに、教師用ガイドを示している³⁰⁾。宗教教育の教師用ガイドは、①序文、②前期中等学校3年間のプログラム計画のためのガイド、③宗教教育の教授・学習法、④シラバスのセクションごとの授業例、⑤評価、⑥宗教教育日誌、⑦有効な資料、の構成であった。

②のプログラム計画のためのガイドには、シラバスの各々のセクションとその項目に従って、プランAからFまで6通りの詳細な指導計画例が示されている。例えば、プランAは、1年目

表3 前期中等学校宗教教育ナショナルシラバスの内容

パート1 (2セクション選択)			パート2 (必修)		
セクション	目 標	内容項目	セクション	目 標	内容項目
A. 信仰団体	<ul style="list-style-type: none"> 人間の共同体の性質とパターンを探る。 信仰団体、教会の性質を理解する。 地方、国、国際的な信仰団体と教会の性質を明らかにする。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 コミュニティー 2 コミュニティーの仕事 3 信仰団体 4 信仰団体間の関係 5 信仰団体における組織とリーダーシップ 	D. 信仰への質問	<ul style="list-style-type: none"> 今日の宗教の信仰の状況を探る。 新しい文化における人間への質問の表現を認める。 宗教の信仰の性質を理解する。 今日の宗教信仰への挑戦を探る。 個人的信仰の状況に対する探求と反省の機会を提供する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 今日の信仰の状況 2 信仰の始まり 3 信仰の成長 4 信仰の表現 5 信仰への挑戦
B. 宗教の基礎：キリスト教	<ul style="list-style-type: none"> イエスが生まれた意味を探る。 イエスについて理解する主な資料としての福音を知る。 信徒として、イエスの生と死、復活のその時と現在の意味を調べる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 コンテキスト 2 イエスについての承認 3 イエスの人と説法 4 イエスの死と復活 5 キリストの信仰 	E. 信仰の式典	<ul style="list-style-type: none"> 儀礼や礼拝は、常に人生や神の秘儀に対する人間の答えの一部であることを示す。 信仰団体が、多様な儀礼の形式の中で、日々の責任をどのように表現しているのかを知る。 礼拝の経験をする。 礼拝と秘儀との関係を結び付け、個人と共同体へ最終的に関連付ける。(Higher Level) 	<ol style="list-style-type: none"> 1 儀礼の世界 2 礼拝の経験 3 秘儀への答えとしての礼拝 (Higher Level) 4 サインとシンボル 5 折り
C. 宗教の基礎：世界の主要宗教	<ul style="list-style-type: none"> 世界の主要宗教の詳細を知る。 その宗教の今日の信者、個人とコミュニティに対する影響を探る。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 コンテキスト 2 証拠の源泉 3 通過儀礼、その他の儀礼 4 伝統の発展 5 伝統、信仰と今日の実践 (Higher Level) 	F. モラルチャレンジ	<ul style="list-style-type: none"> 人間は、個人、地域、グローバルレベルでの関係を規制することが必要であることを探る。 その必要性は、多様な方法でいかに表現されているかを探る。 その必要性は、市民的、法的規約においていかに表現されているかを知る。 宗教信仰が特別な道徳的視点においていかに表現されているかを示す。 2つの主要な世界宗教の道徳的視点(一つはキリスト教)を探る。 最近の道徳的問題を考える中で、これらの視点への信心と無信心が人生に与える影響について分析する。 宗教、道徳と国の法律との関係性に関する見解を生徒に紹介する。(Higher Level) 	<ol style="list-style-type: none"> 1 道徳の導入 2 道徳の源泉 3 道徳の成長 4 行動における宗教的道徳 5 法と道徳 (Higher Level)

National Council of Curriculum and Assessment 2000 "Junior Certificate Religious Education Syllabus (Ordinary Level and Higher Level)", The stationery Office より筆者作成

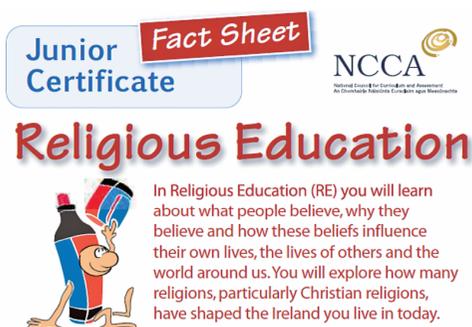


図2 宗教教育 Fact Sheet

にD1（セクションDの1項目目：「今日の信仰の状況」）→D2→A3の順で進めるプランであった（4ページ）（表3参照）。

③の教授・学習法では、ケーススタディ、問題解決・意思決定学習、シュミレーション・ロールプレイ、モデリング、プレゼンテーション・データ解析、自己評価活動、グループワーク、アクティブラーニングを用いた教授・学習のテーマや授業例、ワークシート例などが詳細に記述されている。例えば「ケーススタディ」の場合、セクションF5の「行動における宗教的道徳」の中で、「公正」について、2つの異なる宗教の道徳的視点が信者の意思決定にどのような影響を及ぼすのか、新聞記事を用いて生徒にディスカッションさせる授業例が挙げられていた（26ページ）。

その他、授業例、試験問題例と模範解答、評価のポイントや配点例、生徒に書かせる日誌の例など、教師の日々の授業に直接役立つ詳細な内容が、92ページにわたって示されていた。

3) 前期中等学校教科書

本報告で紹介する教科書はA4版338ページで挿絵や写真を多く含み、定価は27.75ユーロ（2016年8月19日現在、日本円で約3,300円）と高価である。宗教教育に限らず、他教科の教科書も重くて大きく持ち歩くのが大変なため、学校用と自宅学習用に2冊ずつ用意する家庭もあり、保護者の負担が大きいと言われている。

教科書の内容は、セクションAからFにより構成されており、表3に示したナショナルシラバスとテーマ名も共通している。セクションAとC以外、キリスト教を扱ったセクションB、宗派教育のD、E、宗教的情操教育のFは、各セクションにおける項目（チャプター）もナショナルシラバスに準拠していた。

各チャプターの最後には、国内統一試験の過去問題や練習問題と模範解答（2ページ）、ナショナルシラバスに示されたキーコンセプトとその定義がまとめられた表（1ページ）が掲載されている。また、本文中には、キーコンセプトと短い定義が色付きの囲みの中に記載され、文章による詳細な説明がされていた。また、実

際のエピソードを述べたコラムの後に、生徒に質問を与え考えさせる「Question Time（質問の時間）」が随所に設けられていた。

生徒の理解を促すと考えられる表も多用されていた。例えば、セクションAチャプター3「信仰団体とリーダーシップ」の冒頭には、「世界の主要宗教」に関する表が掲載されていた（表4）。アルファベット順で5大宗教の概要が示されている（13ページ）。また、セクションDチャプター15「信仰の始まり」では、「ヒューマニズム」のキーワードを説明するページにヒューマニズムとキリスト教の考え方の違いに関する表が見られた（表5）。このページには、ヒューマニストであるアイルランドの有名人が複数写真入りで登場していた（202ページ）。

この他にも、敬虔なクリスチャンである、2012年のロンドンオリンピック女子ボクシングの金メダリストが、勝利後「イエスに不可能はない」と語ったエピソードが掲載されるなど（セクションEチャプター17「信仰の表現」216ページ）、生徒に身近に感じられる工夫がなされていた。

前述のように、ナショナルシラバスには、宗派教育のセクションDとEは「主要な世界宗教」とあったが、当教科書はキリスト教、主にカトリックの内容であった。国民の8割以上がカトリックであり、中等普通学校の多くが修道会により運営されていることを反映している。また、セクション1チャプター4「信仰団体間の関係」では、「Sectarianism（分派主義）」、「宗教紛争」のキーワードを説明するために、1998年に和平合意が結ばれた北アイルランド紛争について5ページにわたり取り上げるなど、アイルランドの特殊な宗教事情が反映された内容が含まれていた（24～28ページ）。一方で、セクションCチャプター13「仏教」では、日蓮宗を信仰するアイルランド女性の例が1ページを使って具体的詳細に紹介されており（174ページ）、他の宗教を尊重する姿勢が見られた。

4) 後期中等学校における宗教教育の概要

後期中等学校のナショナルシラバスは、3ユニットにより構成され、ユニット1は1セク

表4 世界の主要宗教

宗教	創始者	創始年	地域	聖典	礼拝の場所	信仰
仏教	シッダールタ ゴータマ	BC550	北インド	三蔵（仏典）	寺	多神教（一人以上の神を信仰）
キリスト教	イエス キリスト	CE33	パレスチナ	聖書（福音書を含む）	教会	一神教（一人だけの神を信仰）
ヒンズー教	不明	BC2000	インド、インド ダスバレイ	ヴェーダ	寺	多神教
イスラム教	ムハンマド	CE610	メッカ、サウ ジアラビア	コーラン	モスク	一神教
ユダヤ教	アブラハムと後 のモーゼス	BC1800	イスラエル	旧約聖書	ユダヤ教会	一神教

Lori Whelan, Niamh Mcdermott, 2014 "A Question of Faith 3rd Edition", The Educational Company of Ireland より筆者作成

表5 ヒューマニズムとキリスト教

ヒューマニズム	キリスト教
神はいない	信仰すべき全能の神がいる
イエスは古代において教師だった	イエスは神の子、救世主である
創造は進化による	神が世界やそのすべてを創造した。多くのキリスト教信者は進化を信じるがそれは神の計画の一部である
人工妊娠中絶、安楽死などを認める	すべての命は尊い
人間は高度に進化した動物である	人間は神の考えにより想像された

Lori Whelan, Niamh Mcdermott, 2014 "A Question of Faith 3rd Edition", The Educational Company of Ireland より筆者作成

ションで必修、ユニット2は3セクションから2つの選択必修、ユニット3は6セクションから1つの選択必修となっている。各々のセクションは以下の通りである。ユニット1：セクションA意味と価値の探求、ユニット2：セクションBキリスト教：起源と現代の様相、C世界の宗教、D道徳的意思決定、ユニット3：セクションE宗教とジェンダー、F公正と平和の問題、G礼拝、祈りと儀礼、H聖書：著述と宗教上の聖句、I宗教：アイルランド人の経験、J宗教と科学。各セクションでは、知識・理解・技能・態度にわけて、詳細で具体的な目標が挙げられていた。

アイルランドの宗教教育シラバスには、目標や内容が大変詳細に、国が定める教師用ガイドには具体的な授業例が多く示されていた。また、教科書は忠実にナショナルシラバスに準拠しており、教師が日々の授業をするためのリソースが確実に提供されていることが明らかとなった。

4. まとめと今後の課題

アイルランド中等教育においては、宗教教育は選択教科の一つとして位置付けられ、他教科と同様にナショナルシラバスが設けられていた。2015年の全国統一試験によると、前期中等学校では、46%の生徒が「宗教教育」を受験してい

るが、後期中等学校では2%しか受験していなかった。しかし、実際には後期高等学校でも多くの生徒が宗教教育を学んでおり、他教科とは異なる特殊な選択教科として位置付けられていることがわかった。

前期中等学校のシラバスはA. 信仰団体, B. 宗教の基礎: キリスト教, C. 信仰の基礎: 世界の主要宗教, D. 信仰への質問, E. 信仰の式典, F. モラルチャレンジ, の6つの内容があげられていた。

ナショナルシラバスの他に、教師の日々の授業に直接役立つ詳細な内容が示されている教師用ガイドが国から出されていた。教科書はナショナルシラバスに忠実に準拠し、多くの具体例が示されて生徒に考えさせる内容であった。

他国の文化のみならず、政治や経済の背景を知るためには、その国の宗教に関する知識が必要不可欠である。我が国の教育においても、グローバル社会の中で活躍できる人材を育てるためには、地理や歴史のエピソードとして宗教を捉えるのではなく、各々の宗教の深い精神性をも理解させる教育を行うことが肝要であろう。

アイルランドでは、教師用ガイドにより授業例が多く示されており、教科書も内容が豊富で学校での授業を容易にするようなものであった。表1、表2に示した学習指導要領に含まれる「宗教」に関する内容や、道徳教育の新しい学習指導要領^{註1)}にみられるように、我が国の中等教育における宗教知識教育、宗教的情操教育に対する文部科学省の態度は漠然として曖昧である。現場の教師が授業をするにあたっての戸惑いが危惧される。

特殊な宗教事情を持った国の例ではあるが、教科としてのアイルランドの宗教教育の実態から、宗教教育、また、新しく「特別の教科」としての道徳を導入する我が国のモラル教育の在り方を考えるにあたっての重要な示唆が得られたと考える。

今後はさらに、アイルランドの中等学校における授業実践、小学校における宗教教育について明らかにしたい。

本報告は京都女子大学在外研究員制度により行った訪問調査の一部である。

註

註1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』(平成27年7月)には、「16 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」の「内容項目の概要」に「「伝統」とは、長い歴史を通じて培い、伝えてきた**信仰**・風習・制度・思想・学問・芸術などのことであるとともに、特にそれらの中心をなす精神的な在り方のことである。「文化」とは、人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果を指し、衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・**宗教**・政治など生活形成の様式と内容を含んでいる。」(55ページ、傍線は筆者による)、また、「18 国際理解、国際貢献」の「指導の要点」には、“なお、**宗教**が社会で果たしている役割や**宗教**に関する寛容の態度などに関しては、教育基本法第15条の規定を踏まえた配慮を行うとともに、**宗教**について理解を深めることが、自ら人間としての生き方について考えを深めることになるという意義を十分考慮して指導に当たることが必要である。”(60ページ、傍線は筆者による)とある。

註2) アイルランドでは各教科の教育スタンダードは「ナショナルシラバス (National Syllabuses)」と呼ばれている。よって本報告では教育スタンダードを「ナショナルシラバス」と呼ぶ。

文 献

- 1) 井上順孝 (1998)「教育は「宗教」をどう扱うか」『教育の中の宗教』新書館, 7-25
- 2) 大崎素史 (2004)「占領下の宗教教育論争」『日本の宗教教育と宗教文化』文化書房博文社, 14-59
- 3) 中教審答申 (1998)「幼児期からの心の教育の在り方について」(平成10年6月30日)
- 4) 教育改革国民会議 (2000)「教育改革国民会議報告—教育を替える17の提案」(平成12年12月22日)
- 5) 中教審答申 (2003)「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」(平成15年3月20日)
- 6) 杉原誠四郎「宗教心と宗教的情操」『日本の宗教教育と宗教文化』文化書房博文社, 100-135
- 7) 小山一乗 (2012)「宗教的情操教育の成立基盤考」『駒澤大学佛教学部研究紀要』70, 73-98
- 8) 文部科学省ホームページ「一部改正学習指導要領等 (平成27年3月) 第3章特別の教科道

- 徳の第2に示す内容の学年段階・学校段階の一覧」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2015/03/26/1356257_1.pdf
 (2016年8月19日閲覧)
- 9) 藤原聖子 (2011) 『教科書の中の宗教—この奇妙な実態』岩波書店, 藤原聖子 (2011) 『世界の教科書で読む〈宗教〉』筑摩書房
- 10) 統計数理研究所 (2009) 「国民性の研究 第12次全国調査—2008年全国調査(調査結果発表用資料)」, 64-69
- 11) 表真美 (2015) 「宗教観と家庭教育」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』28, 63-78
- 12) 表真美 (2015) 「保育者がとらえる子どもの自立と家庭教育—幼稚園教諭・保育士を対象とした質問紙調査から—」『家政学原論研究』49, 30-41
- 13) 表真美 (2016) 「宗教観と家庭教育—女子大学生を対象とした質問紙調査より—」『京都女子大学発達教育学部紀要』12, 1-10
- 14) 梶田叡一 (2012) 「仏教の教えやイエスのメッセージの再認識を」『〈いのち〉の自覚と教育』ERP (ERPブックレット), 42-44
- 15) 外務省ホームページ「アイルランド基礎データ」
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ireland/data.html> (2016年8月19日閲覧)
- 16) 外務省ホームページ「諸外国・地域の学校情報」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/infoC50200.html
 (2016年8月19日閲覧)
- 17) ヨーロッパ日本語教師会・国際交流基金2006『日本語教育国別事情調査』149-153
- 18) アイルランド教育・技能省ホームページ
<https://www.education.ie/en/The-Education-System/>
 (2016年8月19日閲覧)
- 19) アイルランド教育・技能省ホームページ
<https://www.education.ie/en/The-Education-System/Post-Primary/>
 (2016年8月19日閲覧)
- 20) アイルランド統計データホームページ (教育)
<http://www.cso.ie/en/education/>
 (2016年8月19日閲覧)
- 21) 前掲ホームページ20)
- 22) 岩下誠 (2012) 「アイルランド公教育の成立をめぐって—研究動向と課題—」『教育学研究』79, 286-296
- 23) 文部省大臣官房調査統計企画課編 (1995) 「アイルランド」『諸外国の学校教育：欧米編』185-190
- 24) アイルランド国内統一試験委員会ホームページ
<https://www.examinations.ie/>
 (2016年8月19日閲覧)
- 25) アイルランド全国カリキュラム・評価審議会 (NCCA) ホームページ
http://www.ncca.ie/en/Curriculum_and_Assessment/
 (2016年8月19日閲覧)
- 26) Lori Whelan, Niamh Mcdermott, 2014 “*A Question of Faith 3rd Edition*”, The Educational Company of Ireland
- 27) 2012年教育関連統計データ
<http://www.cso.ie/en/media/csoie/releasespublications/documents/statisticalyearbook/2013/c6education.pdf>
 (2016年8月19日閲覧)
- 28) National Council of Curriculum and Assessment 2000 “*Junior Certificate Religious Education Syllabus (Ordinary Level and Higher Level)*”, The stationery Office
- 29) NCCA ホームページ (宗教教育ファクトシート)
http://www.ncca.ie/uploadedfiles/Factsheets/RE_fact_sheet.pdf
 (2016年8月19日閲覧)
- 30) National Council of Curriculum and Assessment 2001 “*Junior Certificate Religious Education Guideline for Teachers (Ordinary Level and Higher Level)*”, The stationery Office